

イザヤ書2-3章 「高ぶりを低くされる方」

1A 主の威光の輝き 2

1B 高くされる主の家の山 1-4

2B 空しさに満ちるヤコブの家 5-9

3B ただ独り高められる主 10-22

1C 恐るべき御顔 10-16

2C おごり高ぶる者たち 12-18

3C 主の立ち上がり 19-22

2A 支えと頼りを除かれる主 3

1B 長老や君主のいなくなる国 1-15

1C 気まぐれな者の支配 1-12

1D 頼る人々の除去 1-3

2D 乱れ果てた有様 4-7

3D 舌と行いで背き 8-12

2C さばきの座に入る主 13-15

2B 高ぶる娘シオン 16-26

1C 色目使い 16-17

2C 飾りの腐食 18-26

本文

イザヤ書 2 章から 3 章までを見ていきます。私たちは、前回からイザヤ書を読み始めていますが、ユダとエルサレムに対して、主が、イザヤを通して主に立ち返るべく語られた言葉です。イザヤの名前の意味が、「救いは主のもの」というように、主にこそ救いがあることを、この預言全体が示しています。時は、南ユダ王国の王、ウジヤの治世から始まります。彼は良い王でした。主のみこころにかなうことを行いました。軍備はしっかりと整えており、農業も盛んで、それで国は豊かになり、繁栄していました。けれども、預言者イザヤは、違ったものを見ていました。民の中にある墮落を見ていたのです。1 章では、民が自分たちを造られ、選ばれた主ご自身に反逆していることを、語っていました。

1A 主の威光の輝き 2

そして 2 章に入りますが、イザヤは、一気に終わりの日の幻を見ることとなります。

1B 高くされる主の家の山 1-4

¹ アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて見たことば。² 終わりの日に、主の家の山は

山々の頂に堅く立ち、もろもろの丘より高くそびえ立つ。そこにすべての国々が流れて来る。

「終わりの日」でありますから、これは私たちの時代を越えて、まだ将来の幻です。2章から4章には、主が終わりの日に行われることが示されています。聖書では、終わりの日というのは、すべてのものの破局を描いていません。終わりの日は、すべてのことが完成する時です。主が、初めに持っておられたご計画が、最後に実現する時であります。ですから、私たち信者にとっては、恐ろしい時ではなく、逆に希望の日であり、待ち遠しい時であります。

そして、「主の家の山」と言っていますが、これはエルサレムのことです。主が、シオンという山をご自分の住まいとして選ばれました。今、エルサレムに行けば、そこは山々に取り囲まれていて、エルサレム自体も山の上にあります。モリヤ山という、アブラハムがイサクを全焼のいけにえに献げるように命じられた山がありますが、その山に連続して、南にはシオンと呼ばれる小高い山があります。かつてエブス人が住んでいました。そこをダビデが奪い取って、自分の町としました。シオンの要害と呼ばれます。そして、ソロモンがモリヤの山に神殿を建てました。そのように、神殿のあるところが山の上であり、それで「主の家の山」と呼ばれます。

ここで驚くべきことは、「山々の頂に堅く立ち、もろもろの丘より高くそびえ立つ」とあることです。確かにエルサレムは高いところがありますが、その南にはユダの山地が連なっており、北にはサマリアの山地が連なっています。なので、エルサレムがことさらに高いわけではありません。イスラエルの北の端にはヘルモン山があり、そちらのほうは、はるかに高いです。しかし、その時は、エルサレムが、もろもろの丘よりも高くそびえたつようになるのです。それは、そこに主ご自身、メシアがおられるところとなり、この方が王の王、主の主として君臨されるからです。

このことは、主イエス・キリストが地上に戻って来られる再臨において実現します。ゼカリヤ 14章に詳しく書かれています。世界の軍隊がエルサレムに攻めてきますが、主ご自身が軍隊に戦われます。彼らはことごとく滅ぼされ、そしてエルサレムはオリブ山が真っ二つに割れるなど、地殻変動が起こります。そして、シオンの山がひとときわ、際だって高い高地のようになります。そして「14:9 【主】は地のすべてを治める王となられる。その日には、【主】は唯一となられ、御名も唯一となる。」とあります。そして世界の国々はこの方に拝するため、エルサレムにやって来るのです。

ところで、なぜ山なのか？山は、聖書の中に出てくる幻で王たちを表していたりします。国にある権威や力を表しています。もろもろの丘よりもシオンの山が高くなるというのは、この方があらゆる名よりも高い名が与えられた、この方こそが王の王で、主権者であられることを示しています。そして、御言葉が語られます。

³ 多くの民族が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を私たちに

教えてください。私たちはその道筋を進もう。」それは、シオンからみおしえが、エルサレムから主のことばが出るからだ。

聖書には旧約、新約を通じて、主は山においてご自分の民を集めました。旧約においては、シナイ山においてです。主はシナイ山に現れて、ご自分の言葉を教えとして与えられました。新約においては、山上の垂訓においてです。主イエスは山に上られて、そこに弟子たちが付いて行って、そこで「心の貧しい者は幸いである。天の御国はその人のものである。」と語られました。その言葉は、絶対的な主権者が、王が語っておられる言葉であり、ひれ伏しながら、恐れおののきながら聞くのです。そしてその王の民として仕えるのです。そして、終わりの日には、戻ってこられた王キリストから、エルサレムにおいて、みことばを聞き、そして礼拝します。これが、神の国の姿です。

⁴ 主は国々の間をさばき、多くの民族に判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す。国は国に向かって剣を上げず、もう戦うことを学ばない。

国が国に対して武器を取らなくなるようになる、平和になります。世界平和は、平和の君キリストが再臨されて初めて実現します。しかし、武器を取っていないという平和だけでなく、土地を耕して豊かになるという意味での平和もあります。ヘブル語の平和、シャロームには繁栄も含まれるのです。以前、国際政治学と、平和学においては、平和の定義が異なるということを聞きました。国際政治では物理的な暴力がない状態を平和と定義づけるのですが、平和学においては貧困や差別、不平等といった構造的暴力もない状態のことを言います。ですから、主のもたらす平和は、このどちらの意味も満たしているのです。1章23節で、みなしごややもめのために正しく裁いていないことを主は責められましたが、こうした人々がいることも平和にはなっていない証拠ということなのです。

ですから、私たちの間にも平和があるためには、その繁栄があるためにはどうすればよいのか？そうです、キリストを第一の方とすることです。この方のことばに聞き従います。ちょうど私たちが、山上の垂訓を聞いている弟子のようにすることです。その間には、弟子たちの間に平和があったように、平和があります。そして、主に完全に服従している、聖霊に満ちた弟子たちの間には豊かさもあります。そこに、神の国があるのです。

2B 空しさに満ちるヤコブの家 5-9

⁵ ヤコブの家よ、さあ、私たちも主の光のうちを歩もう。

ここから、主が本格的に、エルサレムとユダに対して語られます。今、お気づきになられたでしょうか？すべての国々が、シオンの山に、みことばを聞きにやってきました。イスラエルの人々が、初めに選ばれて、彼らこそがシオンの都の住民であるのに、初めに多くの国々がやってくる幻があって、その幻に応じて、ヤコブの家も主の光のうちを歩もうと呼びかけられているのです。

しかし、これは、神の福音にあるご計画に示されていますね。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、すべて信じる者に救いを与える神の力です。しかし、ユダヤ人の多くが信じないで、受け入れませんでした。そして、かえって異邦人が信じていきました。そして今に至っています。少しずつ、ユダヤ人の間にも、イエス様を信じる人々が増えていますが、ユダヤ人のほうが後発隊になっているのです。しかし、ロマ 11 章には、異邦人の完成があつてから、イスラエルがみな救われるという約束が書かれています。ですから、初めに、国々が集まってくるという神の国の幻があつてから、それからヤコブの家が、主の光のうちに歩もうという呼びかけの順番になっています。

⁶ まことに、あなたは、あなたの民、ヤコブの家を捨てられました。彼らはペリシテ人のように 東方からの者、ト者で満ち、異国人の子らであふれています。

今の、エルサレムとユダの姿をイザヤは語っています。主が、彼らが、まことの神を知らない異邦人のように歩んでいるまかにされています。ペリシテ人は、今のガザ地区の辺りに住んで、しばしばイスラエルに戦いを挑んでいた民ですが、海洋民族であり、魚をダゴンとして拝んでいました。同じように偶像を拝んでいると非難しているのです。

東方からの者とありますが、モアブの王バラクが雇ったまじない師がいましたね。東方からやってきました。メソポタミア文明のあるところ、シュメール文化があるところで、そこでバベルの塔が建てられ、天にまで塔を届こうとさせました。偶像礼拝の発祥地と言ってもよいでしょう。そこからの者たち、ト者がいっぱいやってきていた、ということです。

⁷ その地は銀や金で満ち、財宝は限りなく、その地は馬で満ち、戦車の数も限りありません。⁸ その地は偽りの神々で満ち、彼らは自分の手で造った物を、指で造った物を拝んでいます。

金銀に満ちていました。また軍事も強化されていました。こうした富んで、強くなっているところから、人々がまことの神から離れ、偶像を拝んでいっています。申命記にも、豊かになってから、彼らをエジプトから救い出した方を忘れて、周囲の神々を拝むことを警告されていました。(申命 6:11-14) 私たちも、自分たちが試練にあい、苦しい時は、まことの神に頼ることをしても、問題がなくなり、豊かにされ、強くされている時に、まことの神からすべて良いものが来ているのに、それを忘れて、他のものにより頼むのです。

⁹ こうして人間はかがめられ、人は低くされます。彼らを赦さないでください。

人々が、まことの神を拝まず、他の神々を拝んでいくとどうなるのか？神のかたちに造られた人々を、低めていきます。非人間化していきます。痛めつけていきます。

3B ただ独り高められる主 10-22

このようにして、神の国の姿から程遠い有様になっていきます。そこで、主はご自分の栄光をもって現れます。「その日」という言葉が、これから何度となく出てきます。それは、主がお定めになった日であり、多くの場合、終わりの日です。主が神の国を回復される時に、この世に対して裁きを行われます。その大きな目的は、ご自身だけが高められるためです。他のものたちの高ぶりを低くされるためです。

1C 恐るべき御顔 10-16

¹⁰ 岩の間に入り、土の中に身を隠せ。主の恐るべき御顔を、その威光の輝きを避けて。¹¹ その日には、人間の高ぶりの目は低くされ、人々の思い上がりはかがめられ、主おひとりだけが高く上げられる。

主は、終わりの日にご自分の顔を地上に向けられます。その顔は、聖なるご性質をともなったものです。それをそのまま向ければ、高ぶった人々はたちまち滅ぼされてしまいます。高ぶりとは、すなわち「私は、神のようにして生きていきたい」ということです。ですから、真の神の威光が現れる時に、その御顔はその高ぶる者を滅ぼすという、怒りに満ちた顔になっているのです。

岩の間に入ったたりして、身を隠しているのは、他のどこにも隠れる場がないからです。今まで、頼りにしているものがすべて取り除かれているので、主の栄光の輝きから免れるところがないのです。「ヘブル 4:13 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」

黙示録 6 章がこいざや書 2 章 10 節以降にある災いを、さらに細かく啓示しています。子羊イエスが、巻き物を御座におられる神から受け取られました。そしてそこには七つの封印がありますが、その一つ一つを解いていかれました。そして第六の封印を解かれた時に起こったことです。「6:12-17 また私は見た。子羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こった。太陽は毛織りの粗布のように黒くなり、月の全面が血のようになった。13 そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが大風に揺さぶられて、青い実を落とすようであった。14 天は、巻物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山と島は、かつてあった場所から移された。15 地の王たち、高官たち、千人隊長たち、金持ちたち、力ある者たち、すべての奴隷と自由人が、洞穴と山の岩間に身を隠した。16 そして、山々や岩に向かって言った。「私たちの上に崩れ落ちて、御座に着いておられる方の御顔と、子羊の御怒りから私たちを隠してくれ。17 神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。だれがそれに耐えられよう。」

この世界というのは、なぜ神を神として認めないのか？それは、神に頼らずとも、自分にはいろいろ頼るものがあるからです。それら、頼る者一つ一つが高ぶりとなっていて、神なんか頼らなく

てよいとなっています。それで、主はそれを裁かれる時を定めておられます。すべて良いものは神から来ているのに、それを認めていないので、それら高ぶるものを取り去られるのです。そして、神ご自身のみが主なのだとことを証しされます。

2C おごり高ぶる者たち 12-18

¹² まことに、万軍の主の日は、すべてのおごり高ぶる者、すべての誇る者の上であり、これを低くする。¹³ またそれは、高くそびえる レバノンのすべての杉の木と、バシヤンのすべての櫟の木、¹⁴ すべての高い山々と、すべてのそびえる峰々、¹⁵ すべてのそそり立つやぐらと すべての堅固な城壁、¹⁶ タルシシュのすべての船、すべての慕わしい船の上にある。

当時、高められていると思われるあらゆるものを、ここで列挙しています。レバノンの杉の木はその地域で有名です。今でもすぐれた姿をしています。そしてバシヤンは今のゴラン高原ですが、すばらしい自然の地形です。そして、その他の高い山々があります。そして人間が造ったやぐらや、堅固な城壁があります。さらに貿易において中心的な役目を果たしている、今のスペインにあるタルシシュがあり、その船があります。これらのものがあるために、人々は、自分は神に頼らなくても大丈夫だ、という一種、偽りの安心感を持つわけです。

¹⁷ その日には、人間の高ぶりはかがめられ、人々の思い上がりは低くされ、主おひとりだけが高く上げられる。¹⁸ 偽りの神々はことごとく消え失せる。

おごり高ぶっている結果として、偽りの神々を拜んでいるのですが、それをことごとく消え失せさせます。

3C 主の立ち上がり 19-22

¹⁹ 主が立ち上がり、地を脅かすとき、人々は主の恐るべき御顔を、その威光の輝きを避けて、岩の洞穴や土の穴に入る。²⁰ その日、人は、自分が拝むために造った 銀の偽りの神々と金の偽りの神々を、もぐらや、こうもりに投げやる。²¹ 主が立ち上がり、地を脅かすとき、人々は、主の恐るべき御顔を、その威光の輝きを避けて、岩の割れ目や、巖の裂け目に入る。

「主が立ち上がり」とあります。これは行動に移すということです。イエスは今、神の右の座に着いておられますが、立ち上がる時が来ます。そして、イスラエルの地には、岩や洞穴が多いです。主が栄光に輝いているのを見て、それを恐れて隠れます。黙示録 6 章には、その恐ろしい輝きに照らされるよりも、自分が死んでしまったほうがましだと思っています。そうです、神の怒りを受けることは恐ろしいことであり、それは死ぬよりも恐ろしいのです。(ヘブル 10:31 参照)

そして興味深いのは、彼らが偽りの神々をこの時に捨てることです。自分の都合に合わせた、自分の欲を満たす神々は、このような試練の時には役に立ちません。まことの神に向かうしか方法がなくなります。主は、イスラエルの民に何とかして立ちあがってほしいと願われて、これらの患難を通るのを許されるのです。

²² 人間に頼るな。鼻で息をする者に。そんな者に、何の値打ちがあるか。

これが、主がお語りになりたかった要点であり、次 3 章においては、いつまでも人に頼ろうとする彼らの惨めな姿を神は明らかにしておられます。

2A 支えと頼りを除かれる主 3

1B 長老や君主のいなくなる国 1-15

1C 気まぐれな者の支配 1-12

1D 頼る人々の除去 1-3

¹ まことに、見よ、万軍の主、主は エルサレムとユダから、支えと頼みになるものを除かれる。すべての頼みのパン、すべての頼みの水、² 勇士と戦士、さばき人と預言者、占い師と長老、³ 五十人隊の長と身分の高い者、助言者と賢い細工人、巧みにまじないをかける者を。

主は、彼らが拠り頼んでいたもののうち、まず必要なものを取り除かれます。その第一は、生きていくのに不可欠な食べ物と水です。多くの人が、主により頼めと呼びかけられても、そんなことしませんよ、と言い返せるのは、安定した水と食料があるからです。それが事欠いたら、人は、同じように平然と、神は要らないと言えるのでしょうか？

しかし、他にも頼ることができます。それが、その国の指導者がいる。軍隊がある。また、占いだってある。いや、専門家もいるから、とします。こうした世の思いを、エルサレムとユダの人々も抱いてしまっていたのです。それで、主はそれらを取り除くと言われるのです。神の民であるはずなのに、神ではないものを頼りにして神に頼らないという問題です。彼らから、この不純物を取り除くために試されます。

2D 乱れ果てた有様 4-7

⁴ わたしは、若い者たちを彼らの君主とし、気まぐれ者に彼らを治めさせる。⁵ 民はそれぞれ仲間同士で虐げ合い、若い者は年寄りに向かって尊大にふるまう。身分の低い者は高い者に向かって。

主に拠り頼むのではなく、とにかく人に拠り頼もうしていますが、治めるのに経験のある者たちにも高ぶり、代わりに若者に、もっとはっきり言えば、気まぐれ者に治めさせることとなります。その背景には、互いに仲間虐げ合って、年寄りに向かって尊大なことを言っているとありますね。

立てられている人を敬うのは、神を敬うことにもつながります。「ロマ 13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」たとえ、自分自身はその立てられている人がしていることに同意できなくとも、主がその人を立てており、私たちがその人のために執り成して祈ることによって、神のみこころがなされると信じています。ですから、悪い時代になると、ここにあるように、立てられている人、熟練した人を退けて、気まぐれ者たちを立てようとするのです。

ユダの国で、それが起こりました。その初代王、レハブアムのところに重税を軽くしてほしいという訴えをしにきた者たちがいました。長老たちは「その通りにしてあげてください。」と言ったのに、同年代の助言者たちは「もっと重くするべきだ」と言いました。それで何が起こったのか、平和ではなく分裂です。南北に分裂しました。そして北のイスラエル王国では、末期に、王たちの治世は非常に短いものになっています。なぜなら、その家臣が王を暗殺して自分が王になるからです。

いつまでも自分が主の前に出ているのではなく、人のせいにして、人に依存している姿です。もし私たちが、自分の身に起こっていることを周囲の人々、立てられている人々のせいにしていながら、一度、注意する必要があります。主がそこで何か語られているかもしれないのに、それを聞かないで、周りを責めているだけなのかもしれません。

⁶ そのとき、人は父の家で 自分の兄弟を捕らえてこう言う。『あなたは着る物を持っている。私たちの首領になってくれ。この乱れ果てた有様を、あなたの手で治めてくれ。』⁷ その日、彼は声を張り上げて言う。『私は傷の手当てをする者にはなれない。家にはパンもなく、着る物もない。私を民の首領にはしないでくれ』と。

主は、気まぐれ者を治めるようにさせて、しかしそのようなことは長く続きませんから、ついには、自分の家で、兄弟に対して、自分を治めてくれと頼みます。あまりにも滑稽ですが、しかし、家にいる人々に、依存しようとしているというのは、現実問題としているのではないのでしょうか？

3D 舌と行いで背き 8-12

⁸ これは、エルサレムがつかずき、ユダが倒れたからであり、彼らの舌と行いが主に背き、主の栄光の現れに逆らったからである。⁹ 彼らの顔つきがそれを表している。彼らは罪をソドムのようにあらわにし、隠そうとしなかった。彼らのたましいはわざわいだ。悪の報いを受けるのだから。

これが根っこにある問題です。高ぶりです。その言葉において、行ないにおいて主の前に出ているか、へりくだらない、祈らないということがあります。衣を引き裂くのではなく、心を引き裂かない。主の前で泣かないことがあります。そうではなく、むしろ「なぜ、主はこのようなことをされるのか。」とかえって、起こっていることに対して主を非難します。あるいは、「こんなことをやっても、

主は見ておられないさ。」と、神を無視します。私たちが試練を受けると、心に苦みが入る、また心に霊的な無気力が起こって、こういう態度になるのです。

けれども、心の奥底では自分たちが悪いことをしていることは分かっています。だから顔つきが、自分たちが逆らっていることを隠せないのです。そして、そうした自分の態度が恥ずかしいと思わないで大胆に見せてしまいます。ソドムの者たちが自分たちの豊かさの安逸を貪っていました。そして、その同性愛の集団強姦を大胆に行なおうとしました。それらを、彼らは隠すことをしていないと言っておられます。

¹⁰ 正しい人は幸いだ、と言え。その人たちは自分の行いの実を食べる。¹¹ 悪しき者、悪人はわざわいだ。その手の報いは自分自身に降りかかる。

主は、このように厳しい言葉を語られているのは、あくまでも悔い改めに導かれるためです。彼らが滅びることを望まれていないのは、主ご自身です。ですから、悔い改める者、へりくだる者を「義人」と呼ばれています。このような者たちは幸いであり、その行為の実を確かに食べることができる、へりくだりは無駄には終わらないことを教えています。

¹² わが民は、幼子が虐げ、また女たちがこれを治める。わが民よ。あなたの案内人たちは迷わす者。あなたの歩む道をかき乱す。」

先ほどは若い者を指導者にすることが書かれていましたが、今は幼子をユダの民が支配すると言っています。そして女たちが治めると言っています。これは、それだけ自分たちが貶められたことを強く言うために、主が選ばれた表現です。

2C さばきの座に入る主 13-15

¹³ 主は論争するために立ち構え、もろもろの民をさばくために立たれる。¹⁴ 主は、ご自分の民の長老たちや君主たちと、さばきの座に入られる。「あなたがたは、ぶどう畑を荒れすたらせた。貧しい者からかすめた物が自分たちの家にある。¹⁵ なぜ、あなたがたは、わが民を砕き、貧しい者の顔を白ですりつぶすのか。——万軍の神、主のことば。」

主は再び場面を、法廷に戻しておられます(1:2,1:18)。そして、長老たちや君主たちを裁判の席に着かせます。これは、主が立ち上がられて裁きを行われる時に、聖徒たちもやってきて、ともに裁きの座に着くからです。「I コリ 6:2 聖徒たちが世界をさばくようになることを、あなたがたは知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるのに、あなたがたには、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。」キリストの公正な裁きがあって、その裁きが任されて共に裁きま。このようにして、主は神の国の正義と公正を回復されます。

そしてその時に、虐げられた者たちのために、虐げた者たちを厳しく処罰するのです。貧しい者、虐げられた者たちには、神は正しい裁きを持っておられ、そこに慰めがあります。

2B 高ぶる娘シオン 16-26

1C 色目使い 16-17

¹⁶ 主は言われた。「シオンの娘たちは高ぶり、首を伸ばし、色目を使って歩き、足に鈴を鳴らしながら小股で歩く。」¹⁷ それで、主はシオンの娘たちの頭の頂をかさぶたでおおい、主は彼女たちの額をむき出しにされる。

イザヤは、ユダの高ぶっている姿を女に喩えて表現しています。1章でも同じことをしていましたね、「どうして遊女になったのか。忠実な都が。(1:21)」と書いていました。ここでは、性的な魅力をつかって男を引きつけようとしている姿です。また、飾り物や衣服を見せびらかせている姿です。人に依存していることです、また依存することによって人に対して支配的になり、相手を思うように操作しています。ユダがまさにそのような姿でした。

しかし、高ぶりというのは、その後破滅が来ると箴言は教えています。「16:18 高慢は破滅に先立ち、高ぶった霊は挫折に先立つ。」主は、こうした高ぶりを低められます。

2C 飾りの腐食 18-26

¹⁸ その日、主はもろもろの飾りを除かれる。足飾り、髪の毛の輪飾り、三日月形の飾り物、¹⁹ 耳輪、腕輪、ベール、²⁰ 頭飾り、くるぶしの鎖、飾り帯、香の入れ物、お守り札、²¹ 指輪、鼻輪、²² 礼服、外套、羽織物、金入れ、²³ 手鏡、亜麻布の衣服、ターバン、かぶり物を。²⁴ こうして、芳香は悪臭となり、帯は荒縄、結い上げた髪ははげた頭、豪華な衣装は粗布の腰巻き、その美しさは焼き印となる。

いろいろな飾り物を身につけていますね。そして衣装もすごいです。そこにさりげなく、「お守り札」もあります。そして主が裁かれる時に、その良い香りが腐った臭いとなります。これは、ユダの人々が外敵に捕えられることを指しています。バビロンによって囚われの民となります。そこで、そのような香りも長いこと風呂に入っていないで、捕え移されているので、腐った臭いとなるということです。そして禿げ頭にされるというのは、女性にとっては屈辱的なものです。それから、「焼き傷」とありますがこれは女奴隷の体に押す焼き印のことです。

²⁵ あなたの男たちは剣に、あなたの勇士たちは戦いに倒れる。²⁶ シオンの門は悲しみ嘆き、さびれ果てて地の上に座す。

男たちは戦いによって倒れて、残されているのは女ばかりになります。そしてシオンがさびれてし

まうということです。バビロンによるエルサレム破壊、紀元前 586 年に成就しました。このように、神は主に頼るべき民が、人間に依頼したことによってどんどん自分を破壊していく姿を、女にして描きました。

そして 4 章には、この女が清められ、その女が表しているエルサレムを、主が、清めて立ち上がらせてくださいます。それは次回の学びにしたいと思いますが、主はこのようにして、私たちが、主なる神以外に頼っている部分を、取り除かれることによって、悔い改める者、へりくだる者ものが立ち返るようにしてくださいます。

私たちが、まず、主によって、そういった不純のものが取り除かれることを知ります。「I コリ 3:13-15 それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。だれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。だれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。」